

京鹿子



平成二十五年四月一日発行
通巻一〇六号(定期刊) 一冊(1冊) 100円

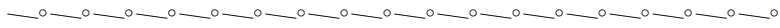
4月号

豊 田 都 峰

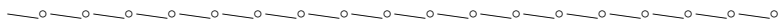
灌 響 集 その四十四

流 氷 斯 日 は 銀 灰 色 に 沖 を 占 む
流 氷 期 月 の ひ び き は し ろ が ね に
野 の 梅 の あ い さ つ 代 り と な る 頃 に
風 花 の 日 ぐ れ の 辻 の 風 化 仏
芽 柳 の こ ろ 約 束 の 二 つ 三 つ
カ ト レ ア の お の づ か ら な る 上 座 ぶ り





雪嶺の遠きは青を沈め暮る
春さぐる林の径はすぐ消えて
薪を割る遠きこだまの山日和
畦みちのふたすぢみすぢ下萌ゆる
あぜみちは梅寒といふことにして
梅東風といふに野末はまだ早き
はやばやと空をつかみて梅白し
枝先の梅青空をあつめゐる



—丸山佳子作品—

紅うつき

丸山佳子



初蝶として彩バスに追ひつけず
中洲より沼の一蝶光りのぼる
紅椿脇抜け落ちても媚もてり
紅うつき折ればひゞかふたなごゝろ
春鴨にうつろごゝろをつかれたる

秀華採集

雪の奥を雪ふる赤子泣いてをり

井上菜摘子

赤子は泣くことが生きる証であるが、雪の奥の雪ふる、その奥処は胎内的原点とも言つてよいところ。人間の一番深奥部の命を把握している、評価したい。

昼も灯るガレのランプや寒の薔薇

片山熙子

去年今年一夜寝かせむはれの句に

森本虹泉

「寒の薔薇」が、よい添加物を得て一番それらしく構成されている。後句は、「一夜寝かせる」にしても一番よい一夜であるため、よい「はれ」の作品が醸し出されたことであろう。



— 近 詠 —

鈴鹿
仁

梅だより

一途さに流す白雲梅だより
城州の風のまぶしき梅長者
笑ふ山写生したくて絵具買ふ
春障子積るはなしを聞いてゐる
野風呂忌や宙へ一途の松の芯



— 近 詠 —

海鼠舟

和田 照海

ともづなは渦巻むすび海鼠舟

三笛に渡船は発てりポインセチア

夕星や狂ひ潜りの番鳩

芦刈の切つ先甘し尖り浪

蒟蒻を掘る素戔鳴尊かな



初夢 北村香朗

初夢のつかみどころのなき始末
淑氣満ち空気が止まるごと思ゆ
暮にかけ歳時記出版相つぎて
腹に支へ四肢の出初式
勘三郎光子も逝きて淋しけり

寒の水 藤岡紫水

これよりは四捨あるのみの老の春
ありし日のままの遺影に初灯明
横綱の高々と投ぐ寒の塩
垂直にのんど落ちゆく寒の水
初天神奉書の墨のひかり合ふ

四月の野 竹貫示虹

校塔の上の青空入學す
少年の歩巾大きく四月の野
子の爪の形の父に似てうらら
骨のある男の減りしさゝらもち
てふてふといふ飛び方で庭去らず

松田都青

年つまる斜めと言ふはじれつたい
日記果つ手垢の付きし文字ばかり
情のある他人でゐたい年の暮
長短針重なる時刻除夜が鳴る
何もかも捨ててしまふも春支度

青睦月 北川孝子

初日燦々守りに過ぎしこの身にも
あらたまの抱負佳境を走るかな
ちぎり絵のやうな雲浮き青睦月
野風呂松の影も直情雪もよひ
年名残ふとたましひの遠出かな

春疾風 柴田朱美

陽だまりの犬をからかふ春疾風
春疾風散歩の足をすくはれる
つまづいて木の根を掴む春疾風
独り居のガラスを叩く春疾風
未熟児をかかへて転ぶ春はやて



巳の年 丸井 巴水
くちなはのなはの太きは注連飾
双六の六を折り目の雛が止む
薄墨の喪はがき綴ぢる年賀帳
揉まれても十日戎の恵比須顔
福笹を掲げいつもの土産提げ

たまゆら 塩貝 朱千
蠟梅の透く空の碧湖の蒼
たまゆらに耳朶のふくらむ雪解川
小白鳥百のおしやべり七彩に
組む足にワルツを聞かせ花菜風
風花や長寿犬にもグルコサミン





京鹿子集

豊田都峰選

雪の奥を雪ふる赤子泣いてをり

亀岡 井上菜摘子

胎内は落葉つむ音土偶かな

恵方詣道真在すあの杜へ
旭さす霜の畦道祈りつつ

剥落の土偶のちぶさ突く霜夜

日々新たな師の心意氣書初展

傷口は吹き曝しなり朴枯るる

家族にも順序のありて雑煮椀

昼も灯るガレのランプや寒の薔薇

京都 片山 熙子

葉ぼたんや引き返せない迷ひ道

年賀状友と年輪増やしつつ
湯豆腐や友あこのころの顔になる

冬木立余白に消ゆる靴の音

銀世界手品の一手夜の雪

あらたまの白を散らせり都鳥

粉雪や凡てに丸まり積りゆく

去年今年一夜寝かせむはれの句に

枚方 森本 虹泉

初詣絵馬に太字の希望校

雪明り白き車も薄茶色

オハイオ 水谷 直子

アリソナ 伊吹 之博

ごちそうも和食恋しき三ヶ日

ロゼルス 丸田 信宏

お土産は英語の絵本年の暮

0歳とばばの会話初笑ひ

友情に国の壁なし春隣

雪積むやペンギン歩きの親子連れ

札幌 野村 鞆枝

虫歯また痛みだしてる師走かな

颯爽とはいかず雪の交差点

受話器より洩れ来るチャイムクリスマス

友ありて心通へる寒の菊

酒田 藤波 松山

気功する窓打つ霰また烈し

なつかしき歌声ききし冬座敷

鮎を神棚に上げ風の音

年玉の額が頭痛の年金者

波川 東 秋茄子

おみくじをそつと気にする受験生

今年も八十路を無事にと白椿

風花や受験生の背に舞ひまはる

期日前投票終へて冬曇

さいたま 神田 惣介

亡き友の噂は絶えず忘年会

歳末やいつもの列車恙無し

孫集ひピアノ連奏聖夜かな

元日や両手両脚よく動き

千葉 河内 桜人

初春や先づは目出度き親子獅子

生きるだけ生きる勇氣や菊脛

中村座跡風花の華々し

一葉散る月にしづかな殺氣

鼻のうしろに目あり蘭奢待

酔牡蠣吸ふ畳の上はさざなみす

葱の泥十指をまとふ祖母の昼

とつくりのセーターゆつくり脱いで泣く

直江 裕子

身を隠す遊びのつづき大枯野

踏みごたへあるやうでなき落葉かな

凍蝶のはつと二翅のありしこと

冠雪の富士落日の景境

高野 春子

寒林や白き鳥が目を覚ます

初景色雀と猫と亭主どの

哀しみのからりと暮るる冬木立

雑煮餅だんだん遠くなる山河

一月の机上に乾くイヤリング

佐々木紗知

倚りかかる椅子の軋みや冬深む

しんがりの我が裾を踏む雪女郎

雪予報すぐに目の行く子の任地

歳末のカタログを囓む郵便受け

小春日や鉄道唱歌の明石まで

布川 孝子

丹田を締む冬ざれの橋長く